

近畿大学大学院 学生員○田中 清久

近畿大学理工学部 正 員 三星 昭宏

1. はじめに

日常生活の場である住区内において、高齢者や移動に身体的困難を持つ人のモビリティ（移動性）を改善することは、活力ある地区を実現するために必要な重要課題である。また、住区の交通計画において住民の潜在交通需要を考慮することは、交通計画策定を行う上で重要な視点である。

本研究は、住区内における交通実態を把握しモビリティの問題点を解明するとともに、潜在交通需要に関わる要因や、道路整備により外出が増える傾向を持つ人の特徴を探ることを目的とする。

2. モビリティについて

図1は、モビリティに影響を与える要因である。モビリティには、「個人属性」「居住地特性」「外出先特性」など様々な要因が相互に絡み合い、個人ごとに異なる。本稿では交通実態の分析のところで「個人属性」の身体的困難について分析を行う。ここでいう身体的困難の定義は、住民が各種交通手段での移動時に身体的な困難を感じる人を意味する。

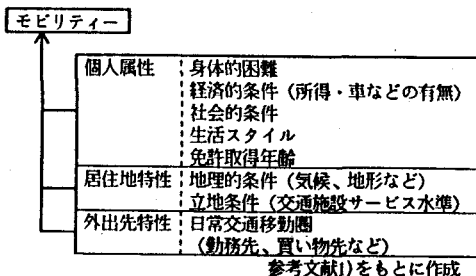


図1 モビリティ評価に影響を与える要因

3. 調査について

平成5年4月に住区内街路研究会が守口市と門真市にまたがる石原・大倉町を中心とした地区の住民を対象に「生活道路に関するアンケート調査」を訪問配布・訪問回収方式で行った。1104票配布し、有効回答数は480票（43.5%）であった。対象地区は、木賃住宅や長屋建てが密集した住商混在地域である。地区の概要を表1に示す。

表1 アンケート調査地区の概要

人口（人）	8009
世帯数（世帯）	3420
面積（ha）	58.50
人口密度（人/ha）	136.9
交差点数（個）	352
1ha当たりの交差点数（個/ha）	6.02

4. 交通実態の分析

年齢階層別の外出頻度（図2）は、週に10回以上外出する人が40歳代以上で減少傾向にある。外出の少ない理由は、「必要がない」が最も高いが、70歳以上の高齢者では「疲れるから」という理由が最も高い。

交通手段別の身体的困難（図3）をみると、自動車運転時に身体的困難を感じる人は、中年者から高齢者にかけ減少している。70歳以上では身体的困難を感じ、利用している人はいない。これに対し自転車は、70歳以上で利用している人（58.5%）の内、約半数以上の人

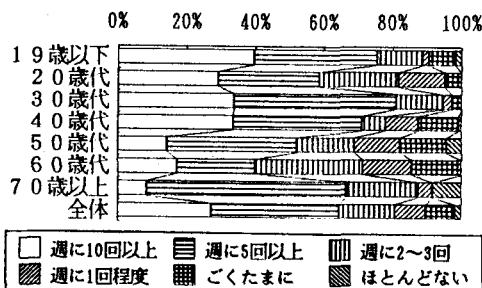


図2 年齢階層別外出頻度

が身体的困難を感じつつも利用している。徒歩時については、加齢とともに身体的困難を感じている。住区内の交通基盤整備には、高齢者のモビリティ確保の観点から、なるべく身体的な負担をかけないような、また自転車・歩行者に対して身体的な困難を感じる人にとって安全で快適な整備が必要である。

5. 潜在交通需要の分析

潜在化している交通需要を把握することは、住区の交通計画を策定する上で重要な視点である。そこでアンケートでは、住区内が①「交通混雑や危険が緩和された場合」、②「緑や休憩施設が設置され、歩いて楽しい

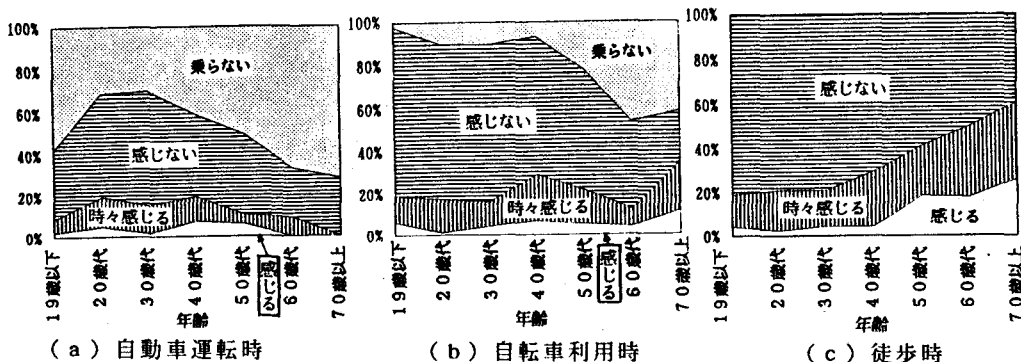


図3 年齢階層別の身体的困難

道路になった場合(以下、楽しい道路と略す)の2種類の道路改善により、外出が増えるかどうかの回答を求めた。この2種類の改善では①より②の方で結果が顕著にでており、本稿では②の「楽しい道路」の結果について述べる。

道路改善による外出の変化は、男女ともおよそ75%の人が増えると答えている。また潜在交通需要の要因を探るため、道路改善により外出が増えるかどうかを外的基準として数量化Ⅱ類による要因分析を行った。結果を表2に示す。

道路改善による外出の変化は、年齢が最も大きく影響し、以下徒歩時の身体的困難、職業と続く。年齢については、70歳以上といった高齢者で外出が変化しない傾向が強い。定住意識では転居希望の人が増加傾向が強い。身体的困難をみると、徒歩時に身体的困難を感じる人は、変化しない傾向にある。自転車利用時では、感じる又は乗らない人が増加傾向にある。また、掲載はしていないが、家の近辺を歩く時に不満を感じる人程、外出が増加する傾向にある。

6. おわりに

本研究は、住区内におけるモビリティを交通手段別利用時の身体的困難を把握することにより問題点を提示した。また要因分析により、潜在交通需要に関わる要因、外出が増える傾向がある人の特徴の把握を行った。今後は、具体的な住民の求める道路整備はどのようなものなのか把握を行うことが、よりよい地区を実現するためには必要である。なお、本研究の調査・分析にあたり住区内街路研究会(中部大学竹内教授他)の方々に、感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 加藤晴久: 交通困難層のモビリティ分析、近畿大学修士論文、1993
- 2) 三星昭宏: 高齢者のモビリティについて、高齢者の交通安全と交通対策に関する研究、大阪交通科学研究会報告書、1993
- 3) 木村一祐、清水浩志郎他: 高齢化社会における道路交通環境に関する考察、第19回日本道路会議論文集

表2 道路改善による潜在交通需要の要因分析

アイテム	カテゴリ	度数	カテゴリ-数量	レンジ
性別	男性	114	0.360	0.663 (0.149)
	女性	136	-0.302	
年齢	19歳以下	25	0.107	2.702 (0.228)
	20歳代	61	-0.096	
	30歳代	45	0.475	
	40歳代	53	0.016	
	50歳代	41	-0.037	
	60歳代	17	0.017	
	70歳以上	8	-2.227	
職業	自営	25	-0.748	1.318 (0.206)
	会社・団体役員	9	0.026	
	専門・事務職	39	0.338	
	技能工・労務職	25	-0.727	
	販売・サービス	16	0.537	
	公務員	10	-0.781	
	主婦	71	0.254	
	無職	15	0.191	
	学生	25	0.218	
	その他	11	-0.062	
免許所有	免許あり	108	-0.220	0.388 (0.091)
	免許なし	142	0.168	
定住意識	ずっと住みたい	77	0.134	1.132 (0.214)
	しばらく居たい	74	-0.591	
	転居したい	55	0.541	
	わからない	44	0.084	
老後の生活スタイル	常勤で外に働く	77	0.181	0.765 (0.144)
	働かず家に半々	46	-0.168	
	半々	84	0.210	
	わからない	43	-0.555	
外出頻度	週に10回以上	66	-0.436	1.225 (0.200)
	週に5回以上	96	0.055	
	週に2~3回	39	0.789	
	週に1回程度	28	-0.299	
	ごくたまに	21	0.053	
身体的困難 徒歩時	感じる	13	-0.275	1.398 (0.044)
	時々感じる	51	0.122	
	感じない	186	-0.014	
身体的困難 自転車 利用時	感じる	10	0.183	0.358 (0.070)
	時々感じる	40	0.140	
	感じない	169	-0.093	
	乗らない	31	0.266	

相関比 0.228

() : 偏相関係数